

「混沌」の闇

高 橋 憲 昭

近頃、学問論が学界で問題となることが多い。しかも今まであまり関心の対象とならなかった局面に焦点が置かれているようである。それについて日頃考えていることの一端を述べたい。

我々が生きる生活世界は、異質性に満ちた自然現象や人間的現象が無秩序に存在する混沌とした世界である。学問、特に科学はその混沌のなかから一つの整理された体系的知識を獲得することによって生活世界をよりよく認識しその本質を理解しようとする。いいかえると、科学的に整理された体系的知識の一つの極が法則であるとすれば、科学は法則を定立することによって現実の生活世界についての認識と理解を深め将来をも予測しようとする。いずれも人間の幸福に役立たせるためである。

いうまでもなく、法則は事実の観察を基礎とした論理的思考のうえに成立ち、計量可能性をその特質としている。社会科学に比べて自然科学の発達が速いのは、自然科学の対象と方法が観察と計量に適合的であるからである。しかし考えてみれば、混沌に満ちた生活世界を、知識の次元においてであるにせよ整理し尽くすことは凡そ不可能である。特に人間的事象にあっては計量化しえない領域が存在することを見ることができない。観念、或いは意味の世界は計量的方法には適合的でない。社会関係や社会集団も人間の具体的行為がその基本的構成要素であることからすれば、行為の分析が第一義的となるが、極めて多様な具体的行為の背後にある動機に内包される「意味」の世界は科学的に如何に取り扱うことができるのか。過去、社会科学の領域においてはその取扱い方について幾多の研究遺産が存在し、そこに自然科学と異なった方法論的特質を見だしてい

る。いいならされた表現を使えば「量」に対する「質」的方法である。たとえば、量的には単なる異なった音の連続に過ぎないものも、聴く人にとっては快感を生みだすメロディーとなる。また、おなじメロディーもその時の状態によって全く異なる感覚を生ずることもある。ここに「量」と「質」とについての単純な差異を見ることができ、このように自在無限に変化する不確定要素を含むいわゆる「質」的領域に計量的手法はどの程度迫ることができるのか。適切な指標を用いることによって「質」を「量」に還元する方法も研究されてきてはいる。

だが、人間は、また人間によって形成される社会は本質的に整除されえない混沌とした領域を含んでおり、そのものの中に人間や社会の「なま」の命と力の根源があるともいえる。科学的論理からみれば、それは「あいまい」さの残る領域である。その領域は計量化、或いは数学モデルによるミニマムな分割的分析には適合しない。むしろ分割とは逆の総合化、しかも柔軟な動的な総合化になじむものである。最近、認知工学の領域においてみられるファジー (Fuzzy) 理論は、現象の「あいまい」さ「不確かさ」を研究対象とするが、なかでも確率的な不確かさよりも主観的な不確かさを取り扱う。つまり、「あれか、これか」の論理ではなく「あれでもあり、これでもある」という論理である。いわば常識や感情や情操の「あいまい」さを取り込んだ常識的推論の数学的モデルといわれる。このことは、認知工学の領域においてすらも、従来の分割的計量化の手法の限界を認め、主観的な不確かさに迫りうる可能性を求めて方法論的模索が始まったことを意味する。此の理論がどこまで「質」的領域を取り扱うことができるかは問題であるが、既に述べたように人間的事象にあっては安易な如何なる科学的方法をも受けつけない混沌の領域が存在する。或いは、それは意図的に科学的分析を差し控えねばならぬ聖域であるのかも知れぬ。しかし、学問を志すものにとっては、科学、特に科学としての社会学が、どこまでその領域に迫りうるものなのか、その究明は最も基本的な課題であるといわねばならない。

それにしても、生活世界の人間的事象における「混沌」の闇の領域に対して尽きない興味と方法論的関心をそられるのである。